拓本と写真で綴る・文学碑シリーズ Ⅲ

茨城の文学碑百選

Ⅲ

堀込喜八郎 編著

筑波書林

文学碑シリーズ

茨城の文学碑百選

Ⅲ

堀込喜八郎（ほりごめ　きはちろう）

大正十年三月三十一日　下館市に生まれる
昭和十三年三月　茨城県立真壁農学校卒業
昭和十七年二月　従軍、中国河南省杞県警備隊軍事指導官
昭和二十二年三月　復員、農業に従事し日本蔬菜品種改良愛好会（渡辺誠三会長）に所属、蔬菜品種改良に努む
『青い鳥ジャーナル』月刊雑誌『筑波野』編集委員を経て現在フリーライター
茨城県郷土文化研究会理事、茨城民俗学会々員、下館市文化協議会理事、古文書研究会員、日本拓本研究会員、拓本といしぶみの会主宰

著書
『下館の石仏・石塔』（新世紀書房）
『下館の文化財』（私家版）
『茨城の文学碑名碑百選』（筑波書林）
『芭蕉句碑を歩く・茨城の五十八基』全四巻（筑波書林）
『続・茨城の文学碑百選』（筑波書林）

論文
「下妻多賀谷・下館水谷合戦考」「幕末期の寺小屋教育と川口霞湊」「頭書に鵠字のある石塔」他多数

現住所　〒三〇八　下館市二木成四六二
TEL　〇二九六（二四）八四二五

茨城の文学碑百選Ⅲ

平成三年十一月三日発行

編著者　堀込喜八郎
発行者　菊田俊男
発行所　筑波書林
発売元　茨城図書

土浦市港町一―四―十二井上ビル
電話　〇二九八―二三―二一九六
振替宇都宮二―二三四

© 一九九一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『茨城の文学碑百選Ⅲ』の発刊を祝す

このたび館長室に堀込さんと「拓本といしぶみの会」の会員の方々が持参してこられた『続々茨城の文学碑百選』というべき原稿を拝読して驚きました。最初の「茨城の文学碑百選」が刊行されてから既に四年の歳月が流れていましたが、堀込さんや会員の皆さんの郷土の文学碑に注ぐ情熱は依然として素晴らしく燃えていたからでありました。丁度私がヨーロッパに旅立つ直前のことでありましたので、ふとグローバルな観点から欧米における拓本といしぶみに対する関心はどのようなものであろうかという興味もかきたてられたものでした。

考えてみれば県内の文学碑は優に九百基を超えているそうでありますから、今刊行を含めて三百選ではまだ序の口かもしれません。それにつけても堀込さんや「拓本といしぶみの会」の皆さんが益々情熱を燃やしてこの事業を遂行されるよう祈ってやみません。同時に読者の方々にはこのシリーズは揃えてみてはじめて編著者たちの意図するところがわかるだろうと思います。心からご推薦申し上げる次第です。

平成三年秋九月

茨城県立歴史館長　市　村　正　二

まえがき

平成元年、私は「拓本といしぶみの会」発足八周年を記念して、なにか事業をしようということで会員らに計り、『茨城の文学碑・名碑百選』の出版を目論んだ。

出版などという大それたことは、学も浅く、知識に乏しい素人の私にとって、恥を恥と感じない図々しい奴と、揶揄されることを覚悟の上での見切り発車であった。しかしこれには大きな理由があった。それは茨城県に於ける文学碑の研究があまりにも遅れていたからである。

例えば昭和五十六年十月刊『茨城県大百科事典』の「文学碑」の条に「本県にも文学碑は数多く分布し、およそ一〇〇基前後あると思われる」と記述されているように、茨城は文学碑不毛の地として扱われている向きがあった。

近年地方出版が盛んになるにつれて、都道府県を単位とする文学碑に関する出版物刊行が多く見られるようになり、隣県の栃木、群馬、埼玉、千葉などでは、一つの県で数多くの著書が上梓されているのが現状である。ところがわが茨城では、昭和五十四年一月、茨城県文化財審議会委員の室伏勇氏が、四年の歳月を費やして県内の文学碑を尋ね歩き、これを纏めた『茨城の文学碑』の労作一部を出版しただけという寂しさである。しかもこれとて五十五基を収めただけであった。

私は拓本を採りながら、十年の歳月をかけ県内各地を隈なく調査跋渉し、九百余基にものぼる膨大な数の文学碑を発掘することが出来た。これらの資料をむげに捨て去るにはあまりにも惜しい。たとえ文章は拙くとも、あまねくこれらの文学碑を世間の人々に紹介すべき義務と責任を痛感し、蛮勇を鼓舞して出版に踏み切ったのである。

「案ずるより産むが易し」の譬えどうり、類書の無かったことも幸いしてか、県内外各地の方々から意外な反響を頂き、その人気に驚いたものである。

これに力を得た私は、翌平成二年『続・茨城の文学碑百選』を続いて出版した。これも拓本家は勿論、文学愛好者・郷土史研究家ら多くの方々から賞賛と感謝の言葉を頂いた。

これらの人々に励まされた私は、このたび、更に「拓本と写真で綴る文学碑シリーズ三」として『茨城の文学碑百選』を上梓することになった。

この著書で、茨城県内に存在する三百基という数の文学碑を収録したことになるが、ここに収めた碑は、続々編だから先著所収の碑より、文学的に劣るものではないかと指摘される方もあろうかと思われるが、決してそうではない。

筑波山頂の横瀬夜雨「お才」詩碑、日立の新田次郎「ある町の高い煙突」文学碑、大洗子の日原の烈公歌碑や二松学舎創設者で侍講だった三島中洲漢詩碑、野口雨情の天妃山と水戸東照宮の詩碑、長塚節の波崎町・石下町や古河の純愛歌碑、正岡子規が水戸紀行時宿泊した藤代町の旅籠銚子屋の句碑、鮭延寺の熊沢蕃山漢詩碑、古河・湯袋峠・大穂の万葉歌碑、陽成院の百人一首歌碑その他数多くの本県を代表する名碑が含まれている。

なかでも水戸東照宮の「常葉山時鐘銘」は、朱舜水の撰による名文でありながら、未だ正しく読み下した学者が一人もいないという難解なものも収めてあり、学術的にも価値あるものと自負している。

どうぞ前著に倍してのご愛読をお願いしたい。

私は、この出版のためここ数年、畢生の情熱と精魂を傾け尽くして、拓本と、茨城の文学碑研究一筋に打ち込んできた。幸い健康にも恵まれ、前人未踏の空前な県内文学碑の一大集成を成し得たことは、まさに天を仰いで鳴謝したい心境である。

今年は古稀を迎えた私にとって価値ある最大、最良の記念碑になるであろう。しかしこの大事業も決して私一人の力だけではなく、高度な採拓技術を駆使して尽力してくれたわが「拓本といしぶみの会」の会員の協力があったからこそ成し得た事である。

これらの著書は、茨城の文学碑に関する限りこれだけの一大集成はなく、文学碑の事典的内容を持ち、県内文学碑めぐりの親切なガイドブックになり、また今後の文学碑建立計画に対するより良きスタイルブックとなる性格をも兼ねているであろう。

またこの書を愛読して下さる皆さんが、それぞれ好みの地域を抜きだし、文学碑めぐりを計画されても良く、本書をひもとくことにより、夢を机上に乗せ、居ながら所在地を駈けめぐるだけでも、結構楽しいことであるはずである。

ここに収めた挿絵の写真は、本文とに季節のずれが生じたり、素人の私が写したもので不満足なものが多いことをご了承願いたい。碑の写真下の数字は、碑の高さ×幅を㎝で示したもので、拓本の大きさは原碑から概算されるようお願いしたい。特に採拓者の便宜を考え、普通画仙紙では採拓不能の大碑に限り、拓影の下に拓本の縦横寸法を入れておいたので参考にして頂きたい。

このたびの刊行にあたり、わざわざ序文を頂いた市村正二先生や、本書を草するにあたり、荒井萬平、後藤文二、川俣正弘などの諸先生や、その他多くの方々の指導、助言を頂き衷心より深くお礼申し上げます。また拓本写真の撮影を奉仕して下さった栃木県佐野市の拓友・内田延二氏の温情に対し深く敬意を表します。

終りに、再度にわたりこの出版を引き受けられた筑波書林菊田俊男社長の厚誼と侠援とに対し、深甚なる感謝の誠を捧げるものである。

平成三年五月吉日　　雑草庵にて　　堀込喜八郎しるす

茨城の文学碑百選シリーズⅢ　目次

序　市村　正二
まえがき　堀込喜八郎

1 野口雨情顕彰碑……北茨城市磯原、天妃山……8
2 時雨音羽詩碑……北茨城市磯原、旅館としまや……10
3 五世白兎園宗瑞句碑……日立市常陸多賀駅前……12
4 義泰・朴翁・寛・三歌併刻碑……日立市水木町、泉が森……14
5 本居豊穎歌碑……日立市川尻町、蚕養神社……16
6 新田次郎文学碑……日立市宮田町、かみね公園……18
7 金羅・丹鶏句碑……日立市大久保町、鹿島神社……20
8 道路修通記念之碑……久慈郡大子町池田……22
9 菊池香清嵯峨草橋句碑……久慈郡大子町三ヶ草……24
10 八龍神社の芭蕉句碑……久慈郡大子町上岡、八龍神社……26
11 大竹弧悠常明寺句碑……久慈郡大子町上金沢、常明寺……28
12 木梨波浪句碑……久慈郡水府村松平、密蔵院……30
13 烈公西金砂神社歌碑……久慈郡金砂郷村、西金砂神社……32
14 梅照院の芭蕉句碑……常陸太田市木崎町、梅照院……34
15 猿田禾風句碑……那珂郡瓜連町静、静神社……36
16 義公石塚城跡歌碑……東茨城郡常北町石塚、石塚城跡……38
17 網のし唄碑……那珂湊市平磯海岸……40
18 義公姥の懐歌碑……那珂湊市殿山町、牛久保海岸……42
19 烈公子の日原歌碑……東茨城郡大洗町東光台……44
20 三島中洲漢詩碑……東茨城郡大洗町東光台……46
21 義公歌鐘銘……東茨城郡大洗町祝町、願入寺……48
22 北村西望詞碑……東茨城郡大洗町、大洗駅前……50
23 姫子の芭蕉句碑……水戸市姫子町、平松邸……52
24 烈公農人形歌碑……水戸市常磐町、義烈館……54
25 鈴鹿野風呂句碑……水戸市北見町、東武館……56
26 野口雨情その夜詩碑……水戸市宮町、東照宮……58
27 常葉山時鐘銘……水戸市宮町、東照宮……60
28 郡司野鈔句碑……水戸市元石川町、郡司邸……62
29 吉田高浪千波湖畔句碑……水戸市仙波町、千波公園……64
30 能仁寺教明句碑……東茨城郡美野里町、山中薬師……66

31 地蔵堂の芭蕉句碑……鹿島郡鉾田町当間、大教院跡……68
32 宇野沢竹童句碑……鹿島郡大洋村阿玉、大儀寺……70
33 乾修平句碑……鹿島郡大洋村阿玉、大儀寺……72
34 鹿島神宮の芭蕉句碑……鹿島郡鹿島町、鹿島神宮……74
35 内田野帆鹿島句碑……鹿島郡鹿島町、鹿島神宮……76
36 息栖神社の芭蕉句碑……鹿島郡神栖町、息栖神社……78
37 長塚節豊ヶ浜歌碑……鹿島郡波崎町、豊ヶ浜児童公園……80
38 小川芋銭波崎句碑……鹿島郡波崎町、利根公園……82
39 潮来あやめの碑……行方郡潮来町、前川あやめ園……84
40 高寺真風流歌碑……行方郡麻生町天王崎、八坂神社……86
41 沼尻りん歌碑……行方郡麻生町天王崎、八坂神社……88
42 鴨下潮人句碑……行方郡麻生町藤井久保、光照寺……90
43 日置海太郎句碑……行方郡北浦村両宿、河野邸……92
44 山居由之句碑……行方郡北浦村長野江、化蘇沼稲荷……94
45 土子啓山句碑……行方郡玉造町羽生、万福寺……96
46 修善院の芭蕉句碑……東茨城郡小川町下吉影、修善院……98
47 醍醐味風句碑……石岡市府中、昭光寺……100
48 関良可句碑……新治郡千代田村角来、関邸……102
49 滝田玉水句碑……新治郡八郷町柿岡、高友山……104
50 湯袋峠の万葉歌碑……新治郡八郷町、湯袋峠……106
51 三鬼実橋爪歌碑……西茨城郡友部町橋爪、三鬼邸……108
52 大津秀雄詩碑……東茨城郡内原町五平、大津邸……110
53 大武雲夢漢詩碑……笠間市笠間、大石廃邸……112
54 高野公男・船村徹歌謡碑……笠間市富士山、つつじ公園……114
55 座頭市の碑……笠間市富士山、つつじ公園……116
56 北条時頼歌碑……笠間市稲田、西念寺……118
57 宗尊・尊澄・信尹句歌碑……西茨城郡岩瀬町、磯部稲村神社……120
58 友常玲泉子句碑……西茨城郡岩瀬町西小塙、月山寺……122
59 坪井翠泉句碑……西茨城郡岩瀬町、北栗山公園……124
60 飯田翠雨句碑……西茨城郡岩瀬町、北栗山公園……126
61 大竹東興漢詩碑……真壁郡協和町蓬田、天満宮……128
62 谷凡美詩碑……真壁郡協和町小栗、大谷邸……130
63 服部米山句碑……下館市樋口、光見寺……132
64 伊藤破塵句碑……下館市本城町、八幡神社……134
65 竹山鶯谷、雀里句碑……下館市八丁台……136
66 弘経寺の与謝蕪村句碑……結城市西町、弘経寺……138
67 関町茶六句碑……結城市西町、愛宕神社……140
68 中村桑翠句碑……結城市戸野町、大輪寺……142
69 光岡紅羽句碑……結城市本町、聡敏神社……144
70 田村緑朗句碑……結城市久保田、田村邸……146

71 池田梨汀句碑……真壁郡関城町関本、光明院跡……148
72 磯山松翁歌碑……下妻市下妻、新福寺……150
73 門井八郎歌謡詩碑……下妻市、砂沼湖畔……152
74 木村楽軒句碑……真壁郡真壁町桜井、伝正寺……154
75 横瀬夜雨詩碑……つくば市、筑波山頂……156
76 中村正爾歌碑……つくば市筑波、筑波山神社……158
77 陽成院歌碑……つくば市大穂、テクノパーク大穂……160
78 大穂の万葉歌碑……つくば市大穂、テクノパーク大穂……162
79 根崎梧楼句碑……土浦市中央、亀城公園……164
80 五老井窠雄句碑……土浦市真鍋、善応寺……166
81 川村歌子歌碑……土浦市桜町、川村邸……168
82 内田野帆東光寺句碑……土浦市大手町、東光寺……170
83 柳沢柳坦句碑……土浦市中央、天神社……172
84 増生幻樹句碑……稲敷郡美浦村布佐、布佐公民館……174
85 天地庵月提句碑……稲敷郡新利根村上根本、阿弥陀寺……176
86 星野一楽句碑……北相馬郡利根町布川、徳満寺……178
87 澤ゆき詩碑……龍ケ崎市馴馬、歴史民俗資料館……180
88 小川芋銭龍ケ崎句碑……龍ケ崎市ニュータウン、松葉団地……182
89 正岡子規藤代句碑……北相馬郡藤代町、河原崎邸……184
90 徳富蘇峰漢詩碑……取手市取手、長禅寺……186
91 坂村真民詩碑……取手市白山、弘経寺……188
92 烈公取手歌碑……取手市取手、本陣跡……190
93 篠塚伊賀局歌碑……水海道市大輪町、安楽寺……192
94 報国寺の芭蕉句碑……水海道市亀岡町、報国寺……194
95 石塚友風子句碑……岩井市神田山、延命院……196
96 熊沢蕃山漢詩碑……猿島郡総和町大堤、鮭延寺……198
97 古河駅前の万葉歌碑……東北本線古河駅西口広場……200
98 長塚節、若杉鳥子純愛歌碑……古河市鴻巣、古河総合公園……202
99 関井周蔵・林子夫妻歌墓碑……結城郡石下町新石下、西福寺……204
100 長塚節石下歌碑……結城郡石下町、町民文化センター……206

参考文献
採拓者住所録

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1．野口雨情顕彰碑

所在地　北茨城市磯原、天妃山入口

交通の便　JR常磐線磯原駅より日立電鉄バス大津平潟行に乗り天妃山入口下車、徒歩3分

遠く朝日は
海よりのぼり
千里奥山
夜があける

雨情

JR磯原駅からバスに乗り、大北川沿いに約一キロ走ると、白砂の海岸に老松に覆われた小高い天妃山がある。天妃山は半島型の岩山で、東側の突端は巨岩奇石に囲まれて太平洋の波濤が砕け散り、山の西南側は大北川の河口にのぞみ、大北川と親潮の沿岸流によって形成された河口の砂丘のデルタ地帯が可憐な待宵草の花を咲かせている。

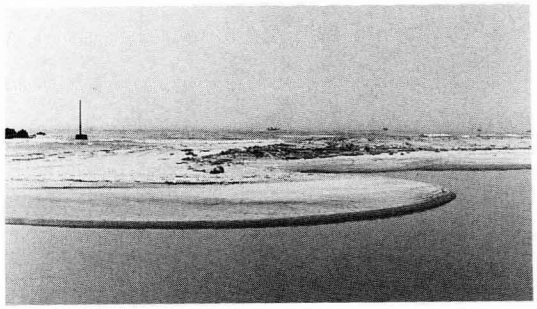
『常陸国誌』に「東は渺漫たる海なり、朝となく夕となく波濤磯磧に激しく翻翻として雪を砕く、実に奇観と言うべし」とある天妃山は古くは「朝日指峰」と呼ばれ山上には薬師如来が祀られていた。元禄三年（一六九〇）徳川光圀はこれを村内の松林寺に遷し、明僧東皐心越が護持してきた天妃聖神を鎮斎、海上守護の神として大津、磯原両村の鎮守とし修験行蔵院を置き、山上にはいつも灯火を点じ、或は大旗を立て漁船や廻船の目当てとした。光圀はこの地に遊んで次の詩を賦した。

一年両度有佳名　月覆潮濤砕玉声
洗出永輪蒼海水　中秋明熟暮秋明

この天妃山にのぼって見渡すと、眼下の海岸の岩礁上に「松に松風磯原汀小磯の陰にも波が打つ」と刻んだ雨情詩碑が建ち、はるか彼方に白砂の渚が続き、海中に勝景二つ岩の巨岩が眺められる。

天妃山は雨情とその友人兼吉少年（渡辺年之介）の唯一の遊び場所であった。二人が未だ小さかったころ、このあたりはまだ磯原港の一部で、この山は港へ出

雨情顕彰碑　175.5×164

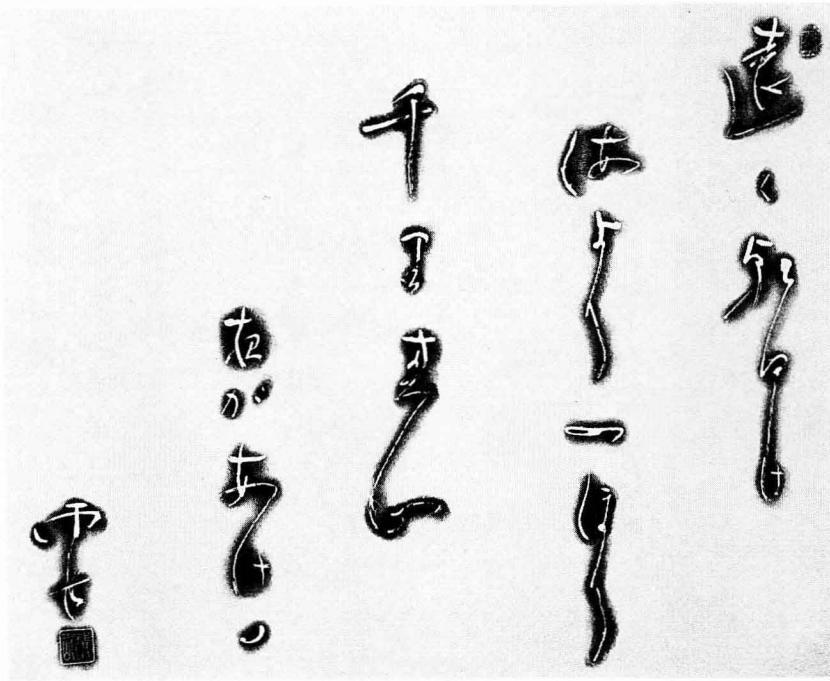


大北川より太平洋を望む

入りする漁船の目標として船人達に愛され、調法がられていた。

天妃山の近くにこの山と向い合った番所山がある。水戸藩では正保二年（一六四五）ここに番所を置き、港への出入りの船や、沖を通る異国船を監視した。この丘陵と天妃山の中間に雨情の生家がある。

遠く朝日は海よりのぼり　千里奥山夜があける



詩碑の拓影　採拓者・堀込喜八郎　97×116

と後年雨情が歌ったのは、この天妃山と番所山の印象だったろうといわれている。雨情の父量平はこの港で船問屋を経営したが、持ち船が沖合いで火災をおこしたりして事業が失敗し、父の死去後、雨情はそれらの借財の返済に追われることになる。

雨情顕彰碑は天妃山登り口の橋の手前に建っている。高さ約一・五メートル、幅四メートルの乱石積みの上に置かれ、詩人時雨音羽が「雨情顕彰碑」と篆額し、その下に雨情自筆の詩が刻まれている。碑陰には雨情門弟泉漾太郎撰文、花園神社宮司神永寧書による碑陰記と、雨情年譜が上段、下段にわたり千数百字がくだくだしく記され、その下に寄付者名が刻まれている。これだけの文字を刻むには大変な費用であったという。雨情竹馬の友渡辺年之介の奔走により建碑され昭和三十年一月二十七日年之介の手により除幕された。年之介は雨情を偲び涙にむせて絶句したという。いま大北川には海鳥が飛び交い太平洋の濤声と松籟が和し碑は雨情と年之介との深いきずなを物語っている。

磯原海岸大北河口の天妃山

2. 時雨音羽詩碑

所在地　北茨城市磯原、旅館ニューとしまや

交通の便　ＪＲ常磐線磯原駅より日立電鉄バス大津平潟行に乗り天妃山入口下車

おもい出させる
磯原ぶしに
末の松並
濡れかゝる
時雨音羽

（碑陰記）「時雨音羽先生は北海道利尻島に生れた。先生の作詩による名曲、出船の港、鉾をおさめて、君恋し、浪花小唄、スキーなどは、当時一世を風靡し今なお広く人々に愛唱されている。先生は、畏友雨情顕彰碑建立のため非凡な努力を重ねている先代年之介の姿に感動して昭和三十年映画「雨情」のシナリオ作成を決意した。映画は大ヒットし雨情の名声は全国に復活した。また先生は幾度となく当館を訪れ先代共々何かと御教示を下されました。よって謝意を永く子孫に伝えるためこゝに建碑する」

時雨音羽詩碑　154×98

〈末の松並　東は海よ
吹いてくれるな　潮風よ
風に吹かれりゃ　松の葉さへも（オヤ）
こぼれ松葉に　なって落ちる　（以下略）

この磯原節は、北茨城市磯原が生んだ偉大な詩人野口雨情の傑作の一つで、雨情が最も故郷にその詩情を刻印したものとして誉れ高い。これに曲をつけた作曲家藤井清水は、作曲にあたり雨情の案内で磯原の海辺に船を浮かべ、海岸を往復しながら曲想を練りあげたという。磯原節は雨情と清水のまれにみる俊英のコンビによって生れ、日本民謡五指に数えられる名謡磯節に勝るとも劣らぬ名作として全国的民謡になりつつある。北茨城市では市制二十周年記念に大北川畔に時雨音羽の筆による磯原節の碑を建てた。時雨音羽は北海道利尻島に

大北川口より番所山を望む

生れ、青年の頃上京し日大法科に通い大蔵省に入る。大正十三年（一九二四）下宿先の女あるじの紹介で巣鴨宮中の雨情宅を訪れ自作の短章数十篇を見て貰った。これが機縁となり終生雨情に師事し、数多くの名詩を矢継早に発表し名声を博した。昭和三十年映画「雨情」のシナリオを執筆、森繁久弥主演により三十一年封切られ、雨情の名声は再び復活した。音羽は昭和二十六年頃よりかねてからの畏友渡辺年之介をたびたび訪れ取材した。この映画のロケで誰よりも協力したのは年之介である。

詩碑の拓影　採拓者・堀込喜八郎　88×81

それは亡き親友雨情への思慕と磯原町発展のためのものであった。

雨情は生前「磯原に兼さんという仲のよい友達がおりヤンしてよく大北川の川口で泳ぎヤンしたよ」「親友というものはいいもんでヤンスな。今でも二人で小学校へ通った夢を見ることがありヤンス」と少年の頃を述懐したが、雨情に先だたれた年之介は昭和二十六年、磯原海岸の自然岩礁上に「松に松風」の詩碑を自費で建て、その後天妃山入口に「遠く朝日は」の顕彰碑も建てた。また「雨情生家」の碑や「七つの子」詩碑などみな年之介によって建てられた。時雨音羽もこれに協力し、潮来の船頭小唄碑や磯原節碑などを揮毫した。時雨音羽詩碑は旅館ニューとしまや玄関前に年之介の子息渡辺力社長により建てられた。詩中にある末の松並とは雨情生家に近い岩城相馬街道沿いの名勝でここの松の見事さは多くの歌になって残っているほどで「松のある港」として名高かった。雨情も磯原節に歌っている。音羽はその磯原節中の末の松並に雨情を偲びこの詩を詠んだという。渡辺力は今は亡き父年之介、雨情・音羽への思慕の念から自費で建碑した。

碑の建つ旅館ニューとしまや

3．五世白兎園宗瑞句碑

所在地　日立市常陸多賀駅前
交通の便　JR常磐線常陸多賀駅下車

> 五世　白兎園宗瑞
>
> 山遠奴具力
> 叚球之亭春農水

（碑陰）

春能海貲利亘　與里觴毛比斗　蝸牛
行里也人農瘁　遠梅農咲　窈廬
立隠須霞耶鳥乃宇之論影　香楽
鳴蛙　古々羅戒江戸膿捨處　白萬

JR常磐線常陸多賀駅は常磐線が全線開通したときに下孫駅として誕生した駅である。昭和十四年一町二村が合併して多賀町となり駅名も常陸多賀駅と改められた。その後日立市と合併して市制を施行、駅圏人口七万七千人となり日立旧市街の人口を上回り、今では工都発展の中核的存在となり一日の乗降客は二万三千人、県内で特急がたて続けに停車するのはここと日立の両駅だけで、それほどビジネスマンの多い駅である。

常陸多賀駅で下車し、改札口を出るとすぐ右側の駅構内に三基の石碑が建てられている。「下孫停車場記念碑」「西行歌碑」「五世白兎園宗瑞句碑」がそれである。その中でひときわ目につくのが宗瑞句碑である。

高さ一・七三、幅〇・五七メートルの白色石灰岩の寒水石正面に、力強い筆勢で宗瑞句が刻まれている。

五世白兎園新倉宗瑞は宝暦四年（一七五四）大久保村古賀内（現桜川町二丁目）の鈴木家に生れ、左内または志津磨と称した。幼時商家に養なわれたが、向学心に燃え十六歳のとき父親の反対を押し切って江戸へ上り、刻苦勉励し、水戸の支藩宍戸の松平大炊頭の家臣となり、後に立身して家老職にまで進んだ。その後家老職を退き俳諧の道に入った。

頒白を薙捨てゝ
鶉とも胡獺とも成らず蹲鴟　白兎園桂山宗瑞

常陸多賀駅

白兎園宗瑞句碑173×57

この句は家老職を辞し、白髪まじりの頭を薙髪して立机し俳諧で生きようと決意した一句である。句中の胡獺とはかわうそ、蹲鴟はやまと芋。

白兎園の俳系は杉山杉風につながる。一世は中川宗瑞。享保期に活躍した。この庵号は徳川光圀から賜わった。二世は水戸藩士広岡宗瑞、三世松居宗瑞、四世浅井宗瑞と続き、その後の五世を新倉宗瑞が継承した。

五世白兎園新倉宗瑞は蕉門俳諧派の宗匠として文化・文政期（一八〇四～三〇）江戸で華々しく活躍し、その門人は数百人に及んだという。その門から六世中島竹道、七世相原衰翁、八世木村宗瑞をはじめ桂花斎水哉、星岡庵東漠、堤芄月その他多くの逸材を輩出した。文政二年（一八一九）三月二日歿、行年六十六歳。江戸大塚富士見坂善心寺に葬らる。歿後門人たちがその俳徳を偲んで郷里にこの句碑が建てられた。

句碑の拓影　151×53
採拓者・落合　満

4・義泰・朴翁・寛・三歌併刻碑

所在地　日立市水木町、泉が森

交通の便　JR常磐線大甕駅下車、徒歩20分

内藤　義泰

常陸にも　またみかの原いづみ河
國こそかはれ　名こそかはらね

安藤　朴翁

尋ねきて　けふ見かの原いづみ川
名にながれたる　浅瀬きよしも

栗田　寛

いさぎよき　心のそこのみゆるまで
水に姿を　うつしてもみむ

新編常陸国誌による

大甕駅から北東へ約一キロ歩くと、市街地では残り少ない緑濃い森がある。「泉が森」と呼ばれる杉、椎、檜、松などの常緑樹が生い茂る森である。その入口に百人一首の歌で有名な中納言藤原兼輔の歌を刻んだ歌碑が建てられている。

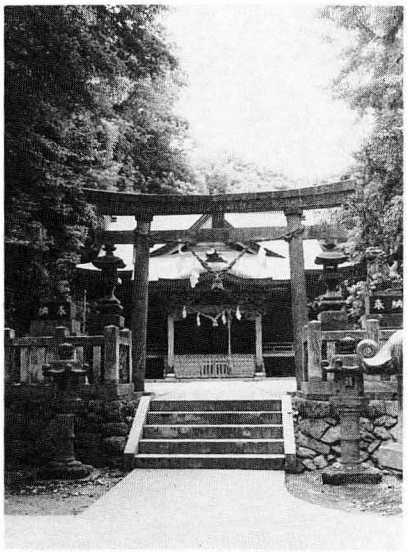
みかの原わきて流るゝ泉川　いつみきとてか恋しかるらむ

この一首は山城国（五畿の一、現京都府の南部）の甕原を流れる泉川を詠んだもので新古今集九九六所収の一首である。この歌中の「みかの原」「泉川」がこの地と間違われて歌碑が建てられたらしく、悪評高いため最近まで刻字がモルタルで埋められていた。

ここから長い参道を進むと突きあたりに泉神社があり、その北東部に湧泉がある。周囲約四十メートルのやや長い楕円形の池で、池の中心に向かって急に深くなる擂鉢形になっており、大小二十の泉穴から清澄な泉が混々と湧き出ている。

『新編常陸国誌』に「密筑の里あり。村の中に冷泉あり。俗、大井と謂ふ。夏は冷かにして冬は温かなり。湧き流れて川と成れり。夏の暑き時、遠邇の郷里より酒と肴を齎賚て、男女会集ひて、休み遊び飲み楽しめり」と記され、また「若人声を発するときは、其湧出尤強く、八九寸或は一尺に至る」と『和名抄』にある伝説を記載しているから、湧泉のほとりで若人が集い歌垣が行なわれていたことがわかる。

いまから約四、五十年前は大小高低重なりあい白砂を盛りあげて湧水し、湧水量は現在の数倍もあり、白砂の清流は下流へと続いていたというが、現在は都市化が進み、地下水の枯渇から水脈が細り、湧水の減少が目立ち昔日の



延喜式内社として知られる泉神社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com